

自ら問いをもち、意欲的に解決に取り組む児童の育成

本研究では、問題解決に当たり、与えられた問題を追究するのではなく、自ら「なぜだろう。」「どのようになっているのだろう」と問いをもち、主体的に解決する児童の育成を目指している。そのために、「自ら問いをもち」ことができるような場面を設定した学習計画を立て、その問いを児童自らが解決方法を考えることができる理科指導の在り方を追究している。

「自ら問いをもち」ためにどのような手立てが必要か。

☆見方、考え方を働かせる場面を設定する。

比較したり、関係づけたりして考えるような場面を設定することで、見方や考え方を働かせることができる。二つの事象を比べたり、ある事象の原因を考えたりすることで、新たな問いが生まれると考えた。

☆揺さぶりをかけるもの

児童の知識や経験とのズレ・事象と事象とのズレ・友達との考えのズレを感じると児童はそこで「あれ、おかしいな。」「AとBのちがいはなんだろう。」という疑問をもち。自らの考えが揺さぶられたときに、「調べてみたい。」「確かめてみたい。」という思いをもちことができると考えた。

☆具体的な経験ができる場の設定。

児童の生活経験が少ない場合、単元の始めに十分に事象と触れ合う場を設定した。未知のものや事象に対しては、「～ではないか。」というような推論を立てることは難しい。第三学年の「音」の単元では様々な楽器を触ったり音を出したりする中で、音が出ているときと出ていない時の違いに着目させ、問題作りを行った。

☆ICT機器の活用

児童一人一人がもった疑問や考えを出し合う際、ICT機器を活用した。一人一人の考えをクラス全体で共有できるアプリケーションを使って話し合いをした。似たような考えを集約し、問題作りができるだけでなく、全員の意見を出し合うことで一人一人の考えを尊重できると考えた。

